



ダイジェスト版

ゆるやかに語る Speaking Softly

【対談者】▶浅羽修丈先生(基盤教育センター教授・図書館長,情報総合センター長)
▶島(職員)／▶三嶋(職員)／▶笹田(職員)

Q1. 図書館のおすすめの場所・使い方と好きな本

図書館の楽しみ方は人それぞれ。島さんのお気に入りには**1階のラーニングコモンズ**。「静寂より雑音派」らしく、空きコマには**視聴覚コーナー**で映画鑑賞を推奨。愛読書は**星新一のショートショート**、長文で眠くなる人に救いの一冊。三嶋さんは**3階の窓際**、奥の隅を選択。静けさと「苦手ジャンルの本棚に囲まれ現実逃避を避けられる安心感」で集中力アップ。選んだ本は『**老人ホームで死ぬほどモテたい**』、タイトルのインパクトに負けない短歌の妙味が魅力。笹田さんは**3階の階段状閲覧席**を推す。明るく静かで、勉強の合間にひと息つける場所。さらに北九州市漫画ミュージアム寄贈の**マンガコーナー**は、図書館に足を運ぶきっかけとして強力な助っ人でおすすめ。浅羽先生も**階段状閲覧席**派。漫画は『**暗殺教室**』で教育者目線の楽しみ方を披露。専門書から『**コンピュータと教育**』を紹介、学びの本質を問い直す名著。そして『**夢をかなえるゾウ**』で日常に喝を入れた経験も紹介してくれた。

Q2. 開館から10年目を迎え、これからの図書館像

2016年に開館した図書館本館は、来年度で10周年を迎える。三嶋さんは学生時代、新館への蔵書移動アルバイトを経験し「建ったばかりの図書館は本当に**ピカピカ**で感動した」と語った。開館当時人気だったのは視聴覚コーナー。DVDを観る学生で賑わっていたが、今やその光景は過去のもの。「DVDは古典になりつつあるね」と島さんが笑う。サブスク全盛の現在、利用は減少傾向だ。一方で図書館の役割は広がった。ラーニングコモンズは授業利用をきっかけに定着し、学生にとって「**友達と話せる場所**」という認識も当たり前になった。かつての「静かに勉強する場所」というイメージは大きく変わった。「昔の図書館は“堅い”場所だったけど、今は**学生が自然に集まる空間**になっている」と浅羽先生も話す。そして「視聴覚コーナーの利用が減っているのは、時代の流れを感じるね」と島さん。Netflixなどの登場で、DVDの需要は激減した。「でも、せっかくのスペースを活かさないのはもったいない。**柔らかい椅子**で、自分の端末を使って動画を楽しめる空間にするのはどうだろう？」と提案する。「サブスクが見られる図書館、ちょっと面白いね」と笑いも交えながら、利用者の過ごし方を考える視点が広がった。かつては「とにかく来館者を増やそう」という意識が強かった時期もあった。しかし、コロナ禍を経て、入館者数は完全には戻っていない。「数字だけを追うのではなく、図書館で過ごす時間の質を高めることが大切」という声もあった。さらに、AIの進展によって「情報を得るだけならAIで十分」という時代に、図書館は何を提供できるのかというテーマも議論に上った。

最後に、浅羽先生が語ったのは「ファスト映画」への危機感だった。「最近映画を10分でまとめた動画が人気だ。短時間でストーリーだけを知って、観た気になる。でも映画は本来数時間かけて

北九大図書館について、3つのテーマで図書館長の浅羽修丈先生と図書館職員3名がゆるやかに語り合いました。1時間にわたる対談のエッセンスを、このページではダイジェストでご紹介します。詳細版は2ページ目に掲載していますので、ぜひご一読ください。

味わう芸術作品。そこに込められた意図や間を感じる大切なのに、それを経験しないまま大人になる人が増えている気がする」。そして、こう続けた。「**図書館は、メディアを“消費”する場ではなく、作品をじっくり楽しみ、考える場であってほしい**。YouTubeやAIで“知った気になる”時代だからこそ、深く向き合う時間を提供する空間が求められている」。

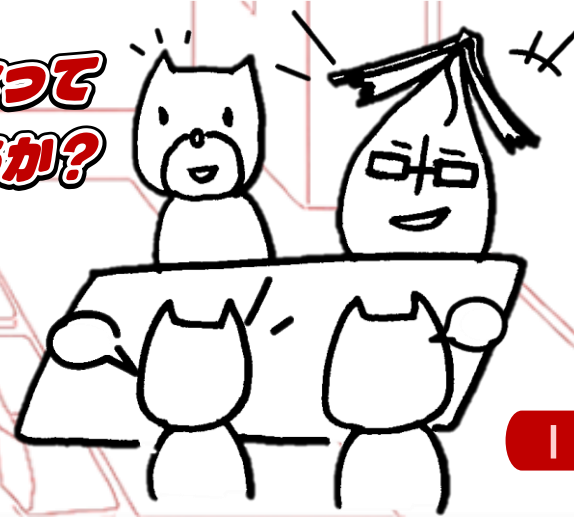
10年を経て、図書館は「本を読む場所」から「**学びをデザインする場所**」へと進化した。次の10年、どんな図書館を思い描くだろう。柔らかいソファで映画を楽しむ未来か、AIと共存する知の拠点か。それとも、まだ誰も想像していない新しい姿かもしれない。一つだけ確かなのは、図書館はこれからも「**人と知をつなぐ場所**」であり続けるということだ。

Q3. AIと図書館の関わりについて

笹田さんは自身のAI活用はまだ限定的だと話す。「以前いた大学図書館でもこちらでも、積極的にAIを使っているわけではないですね」。一方で、北九大図書館の魅力として挙げたのは、丁寧な図書館ツアー実施について。「動画で学ぶのも良いけれど、**実際に歩いて案内される体験は記憶に残る**。両方を組み合わせるのが理想」と提案する。三嶋さんはAIを文章の校正やアドバイスに使うことがあるという。「便利だけど、論文検索では限界を感じることもある。AIが出した情報をそのまま信じるのは危険で、**そこをどう補うか**が司書の役割になると思う」。島さんも同意し、「AIは効率的だけど、判断は人間がしないとね」と笑う。浅羽先生はAIの登場を「ウェブ検索が始めた頃と同じ」と語る。「当ても『人間がバカになる』と議論されたけど、今や検索は当たり前。AIもなくなる。だから、どう使いこなすかを考えるべき」。そのうえで、図書館の価値は「**セレンディピティ＝偶然の出会い**」にあると強調する。「AIは質問に答えるだけ。でも図書館では、探していた本の隣に思わぬ一冊がある。そういう発見や刺激はAIにはできない」。島さんも「本棚を眺めて偶然出会う楽しさを、学生にもっと体験してほしい」と語る。三嶋さんは「OPAC検索でも出会いはある」と指摘しつつ、「でも、AIに質問して終わりじゃもったいない」と続けた。最後に浅羽先生はこう締めくくった。「AIは便利。でも、図書館は“答えを得る場所”ではなく、**思わぬ発見や考える時間を提供する場所**であり続けるべきだ」。

AIが進化しても、図書館の価値は「偶然の出会い」と「深い学び」にある一その思いは4人に共通していた。

今後の図書館はどうなって
いくのだろうか？





ゆるやかに語る Speaking Softly

じっくり詳細版

図書館長と職員3名の対談の詳細版です。ダイジェスト版では省略した4人の掛け合いなどをじっくりとご覧いただきお楽しみください。

【対談者】▶浅羽修丈先生(基盤教育センター教授、情報総合センター長 兼 図書館長)
▶島(職員:2018年度入職)／▶三嶋(職員:2022年度入職)／▶笹田(職員:2025年度入職)

Q1. 北九州市立大学図書館のおすすめの場所や使い方とあなたの好きな本を教えてください。

▶島 : おすすめは1階のラーニングコモンズです。人の声や物音がある方が集中できるタイプなので、喧騒が心地よいです。おすすめの使い方としては視聴覚コーナーで空きコマに映画を一本見るのもいいですよ。好きな本は星新一さんのショートショートシリーズ※1。長文だと眠くなる僕のような人にぴったり。

▶三嶋 : 私は3階の窓側、奥の隅の席が好きです。静かで集中できます。…あと苦手なジャンルが近くにあると無意識に本に手が伸びることがなくて集中できるという理由も。好きな本は『老人ホームで死ぬほどモテたい』※2という短歌集。タイトルに惹かれましたが、一首一首が作品になっていて面白いです。

▶笹田 : 私のおすすめは3階の階段状閲覧席。明るく静かで、勉強の合間にリラックスできます。他の図書館にない珍しい蔵書としては、北九州市漫画ミュージアム様から寄贈されたマンガコーナー。漫画は学生が図書館に来るきっかけになると思います。

▶浅羽 : 私も階段状閲覧席は良いと思います。リラックスできる空間が図書館にあるのは良いですね。私も漫画を読みますが『暗殺教室』※3は同じ教員という立場で見て面白いですね。真面目な本としては『コンピュータと教育』※4は教育の本質を考えるきっかけになった一冊です。また啓発本の『夢をかなえるゾウ』※5は日々のルーチンを変えたいと思ったときに読んで、自分を奮い立たせてくれました。



Q2. 2016年度に図書館本館が開館し来年度で10年目を迎えますが、今後どうなっていくでしょうか？

▶三嶋 : 私はここの卒業生で、大学3年生の時に新しい図書館ができました。2016年だったと思います。当時は新しい図書館へ本を運ぶアルバイトをしていて、完成した時は本当にきれいでした。

▶浅羽 : 僕の学生時代の図書館は「静かに勉強する場所」という堅いイメージでした。でもこの10年で、図書館は友達と話すスペースとして認識されるようになったと思います。昔の堅いイメージから完全に離れていますね。

—開館当時を知る職員 : 開館当初は「人を呼ばなきゃ」という思いが強かったです。授業で先生に使ってもらって、学生が「気軽に使えるんだ」と思えるようになったのが大きかったのかと思います。図書館の変化で言えば、視聴覚資料の利用が減っていますよね？

▶島 : 減っていますね。昔は視聴覚コーナーが人気でしたけど、今はNetflixなどの配信サービスがあるからかもしれません。視聴覚コーナーを活かすなら、端末を持ち込んで柔らかな椅子でリラックスしながら見られる空間にするなど工夫が必要だと思います。

▶三嶋 : 確かに。旧図書館(=現在の書庫棟)のAVホールでは市民利用が多かったけど、新しい図書館になって学生利用が増えたと感じました。でも今は時代に合わせた使い方を考えないといけませんね。

これから図書館はどうなっていくんだろう？

▶笹田 : 私は、大学図書館は「勉強だけの場所」じゃなくて良いと思います。漫画や映画をきっかけに来てもらえるのは大事。そこから別の本に興味広がることもありますし。

▶浅羽 : 視聴覚資料の利用が減っている背景には、若い世代が「メディアを消費する世代」になっていることがあります。典型例はファスト映画。10分で映画をまとめて観た気になる。それが普通になっているのに危機感を覚えます。本来、映画は2時間かけて制作者の意図や間を感じながら味わうものです。それを省略してストーリーだけ把握すれば良いという考え方になっている。作品を吟味する経験をしないまま過ごす学生が増えるのは残念です。

▶島 : 確かに、短時間で情報を消費する時代になっていますね。でも図書館だからこそ、落ち着いて考えられる空間を提供できると思います。

▶浅羽 : だから僕は、図書館を「メディアを消費する場」ではなく「メディアをじっくり味わう場」にしたいと思います。YouTubeやファスト映画のように短時間で消費して次に移るのではなく、一つの作品を楽しむ、考える時間を持つてほしいですね。

Q3. AIと図書館の関わりについてどう思いますか？

▶三嶋 : AIは文章の構成を直すなどでは便利ですよ。でも以前利用者から依頼された論文を調べたら見つからないことがあり、これは生成AIで作成された論題なのでは？と思いました。AIには限界がある。これを理解して使うことが大事だと思います。

▶島 : 僕もAIを活用しています。ざっくり聞いても情報を引っ張ってきてくれるのは効率的。でもソースが間違っていることもあるので、判断は人間がしないといけません。浅羽先生はAI使っていますか？

▶浅羽 : 使います。専門は教育学なので、AIと教育の関係は重要なテーマです。今後、生成AIは排除できません。ウェブ検索が出始めた頃と同じで、なくならない。だから上手に使う方法を考えるべきです。図書館の観点では、AI司書が登場しても人間の司書の役割は残るでしょう。AIは過去のデータをもとに答えるだけ。人間の経験や知見はAIには出せません。三嶋さんの「AIの限界を理解する」というのは重要です。また生成AIは「質問に答える」ことは得意ですが、図書館の本質はセレンディピティ(=思いがけない発見などとの偶然の出会い)。思わぬ出会いや刺激はAIにはできません。図書館はその価値を守り続ける必要があります。

▶笹田 : 前号の「図書館だより」で浅羽先生の巻頭言を拝見してその通りだなと思いました。

▶島 : だからこそ、請求記号で並んだ棚を眺めて偶然の出会いを楽しんでほしいですね。

▶笹田 : 最近は検索して1冊だけ手に取る学生が多いですが、もっと視野を広げると良いかもですね。

▶三嶋 : 私は利用者がキーワードではなく請求記号で検索している姿を見て、ウェブ上でも偶然の出会いができている人もいるんだと思いましたよ。

▶浅羽 : AIの回答で満足するのではなくその限界を理解し、さらに深く探求することが大事です。司書はその橋渡し役になれると思います。

▶笹田 : AIは便利ですが、学生が「正しい情報を得た」と思い込む危険もあります。だからこそ、人と人のやり取りで補う仕組みが必要ですよ。

▶浅羽 : 映画もそうですが、細部にこそ魅力があります。10分でまとめられたら、その楽しみがなくなります。文脈や間に制作者の意図がある。それを味わう経験を失うのは危機感を覚えます。図書館はそうした深い体験を支える場であり続けるべきですよ。

最後にひとことずつお願いします。

▶浅羽 : 知的好奇心を思い出して、学ぶことを楽しんでください。そのために図書館を活用してほしいです。

▶笹田 : 図書館でセレンディピティをぜひ感じてください。

▶三嶋 : お気軽に図書館へお越しください。

▶島 : お待ちしています！





ビブリオバトルを開催しました

Biblio battle



全国大学ビブリオバトル2025の予選会を6月28日に北九州市立大学図書館で開催しました。集まった発表者(バトラー)は6名、それぞれが思い入れのある一冊を紹介してくれました。そして観戦者が選ぶ、最も読みたくなったチャンプ本に選ばれたのは…



『チーズはどこへ消えた?』

スペンサー・ジョンソン著(扶桑社)
文学部 人間関係学科 1年生の
角 杏桜依さんが紹介してくれました。

4月から一人暮らしを始めた自身の環境の変化と本の内容を重ね合わせて語ってくれた角さんの発表を受けて観戦者からは「自分だったらどう思うかと考え、読んでみたいと思った。」や「人生を変えた出会いを見せてもらったような気持ちになった。」というコメントをもらいました。

チャンプ本を獲得した角さんは11月1日(土)に福岡女子短期大学で開催される、九州ブロック地区決戦へ出場します。この地区決戦の上位1名が11月23日(日・祝)に長崎で開催される全国大学ビブリオバトル in ながさきピース文化祭2025(第16回全国大学ビブリオバトル)へ出場します。皆さんもぜひ応援をお願いします!!!

北九大予選会 紹介本 一覧

■六条葵上物語：明眼院蔵

(京都大学文学部国語学国文学研究室編/臨川書店, 1978.3)
請求記号▶ 910.8/Ky6/1-6

■チーズはどこへ消えた?

(スペンサー・ジョンソン著；門田美鈴訳/扶桑社, 2000.11)
請求記号▶ 141.5/J64

■大人もぞっとする初版『グリム童話』

(由良弥生著/三笠書房, 1999)
請求記号▶ 940.28/Y99

■独立記念日

(原田マハ著/PHP 研究所, 2012.11)
請求記号▶ 913.6/H32

■二人一組になってください

(木爾チレン著/双葉社, 2024.9)
請求記号▶ 913.6/Ki41

■No.6

(あさのあつこ著/講談社, 2003.10)
請求記号▶ 913.6/A87/1



働いていたり、いなかったり

Between Jobs and Journeys

勤続7年目の職員と2025年8月に退職した職員にインタビューしました。

Q1. 図書館で働いてみようと思ったきっかけは?

■島 子どもの頃から学校の図書室に行ったり、町の図書館に行くのが好きだったこと、また大学生の頃、大学図書館でアルバイトをしていて、本に関わる仕事・図書館で働くことがとても楽しかったからです。

■深野 きっかけは高校の卒業式まで遡ります。高校の卒業式の日、最後のホームルームに一人ずつ将来やりたいことや進学先などを語る会が開かれました。当時、やりたいことのなかった自分は「さて、何を発表したもんか…」と悩みに悩んだ挙句、ふと小説の中にでてきた『司書』という単語を思い出し、「私は将来図書館司書になる」と語ったことがきっかけです。その場しのぎで言ったことがまさか現実になるとは、言霊というものには存在するのだなと実感しました。

Q2. 実際に働いてみて一番好きな作業は?

■島 レファレンス業務という利用者の調査・研究・情報収集などを支援するサービス対応をしているときです。どんな些細なことでも困ったらいつでも頼ってください。

■深野 リポジトリの登録です。リポジトリとはざっくり言うと、先生や学生の方が書いた論文をインターネット上で見ることができるサービスのことです。そのリポジトリに論文を登録する際に、各論文のタイトルや抄録をみて、先生や学生がどんな研究をしているのかを見ることができ、自分の知らない世界を見ることができてとても楽しかったです。

Q3. 図書館をどんな風に使ってほしいですか?

■島 図書館本館1階は会話ができるだけでなく、電話、オンライン会議などでの発話もOKなエリアです。個人での勉強・調査・研究だけではなく、グループワークやデスカッション、打ち合わせなどでも使ってください。

■深野 図書館のルールのもとで、自由に使ってください。最低限のルールは食べ物を持ち込まない、2階3階は静かに使う、撮影はしない…簡単なことなのでその範囲内で「自由」です。え?簡単じゃないって?六法全書暗記するよりか簡単でしょ。

Q4. 北九大生に一言!

深野 T.Fukano

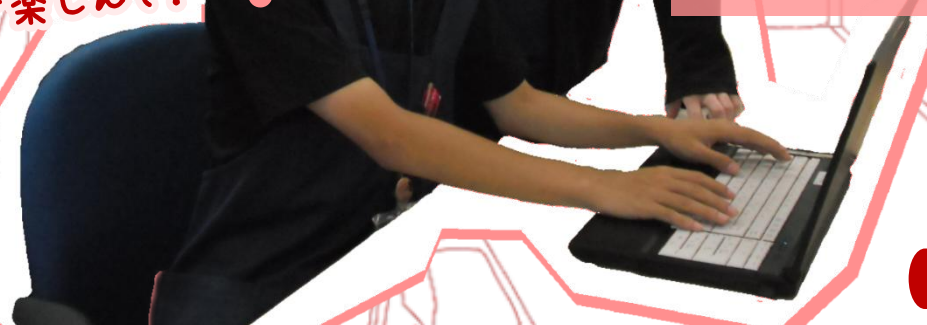
・Time here: 3年
・Fav books:
『蜂と蟻に
刺されてみた』

大学生活
全力で楽しんで!

島 H.Shima

・Time here: 7年半
・Fav books:
星新一さんの
ショートショート
シリーズ

なんでもいい、
困ったら聞いてくれ。



よむけん の なかまたち

(図書館サポーターのページ)

図書館サポーター主催 オープンキャンパス特別イベントを開催しました！

7月20・21日に本学ではオープンキャンパスが開催されました。私たち図書館サポーターも、図書館について楽しみながら知ってもらえるように館内探索イベント「よむけんクエストⅢ」を開催し、多くの高校生が参加してくれました。参加してくれた方には、図書館サポーターが作成したオリジナルしおりや缶バッジの景品をお渡ししました。特に北九大図書館キャラクター「よまんぼう」のしおりが人気で、かわいいという声を多くいただきました。

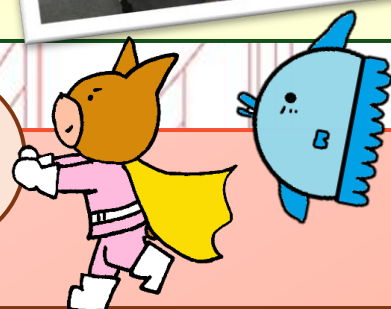
私はグッズ班として今回お渡しした景品の制作に携わったため、多くの方が景品を喜んで手に取る様子を間近に見ることができ、とても嬉しかったです。その他にも、クエストの中で登場する「村人」役として参加者のクエスト進行の手助けもしました。来年も多くの北九大生のたまごたちが参加してくれることを願っています！

(文4年 後田)



図書館サポーターおすすめの短編・長編作品

今回は秋の夜長におすすめしたい短編・長編4作品をご紹介します。



『噛みあわない会話と、ある過去について』

辻村深月 著 / 講談社 (図書館所蔵有:913.6/Ts44)



『かがみの孤城』を読んだことで辻村深月さんの本をよく読むようになり出会った短編集。どの物語も話が進んでいくうちに自分自身のこれまでの嫌な記憶を思い起こさせたり、共感で頭がいっぱいになったりと、視覚だけでなく身体全身が刺激されるような1冊。

(文1年 清浦)

『いのちの車窓から』

星野源 著 / KADOKAWA (図書館所蔵有:914.6/H92)



歌手や俳優、文筆家として活躍中の星野源さんのエッセイ集。本作収録の「ひとりではないということ」が2026年4月から使用開始予定の高等学校国語科「現代の国語」の教科書に掲載されることが決まっている。星野源さんの言葉を通して自分自身の感情の機微まで色濃く見えてくるような、生活が愛おしくなるような1冊。

(文1年 清浦)

『虚実妖怪百物語』

序/破/急

京極夏彦 著 / KADOKAWA

(図書館所蔵有:913.6/Ky3/1)

913.6/Ky3/2

913.6/Ky3/3



突然日本にあふれ出した妖怪たち。混乱する国民と怪しげな政府の動きに阻まれながら、その原因を探るべく彼らは立ち上がるのである。水木しげるや夢枕獏など実在の人物が多数登場するほか、妖怪に特撮に3D貞子にガメラなど…。虚構と現実が入り混じる圧倒的娯楽小説。同著者の『百鬼夜行シリーズ』もおすすめ。

(文1年 濱田)

『罪と罰 上/中/下』

ドストエフスキー 作 江川卓 訳 / 岩波書店

(図書館所蔵有:933/D88/1、933/D88/2、933/D88/3)

信念の正しさを証明するために人を殺した青年ラスコーリニコフ。しかし次から次へと思いがけない出来事が起こる。主人公の葛藤と、ハラハラし通しな展開に読む手が止まらなくなる1冊。登場人物たちの会話や心理描写が秀逸で、現代の作品に引き継がれる「面白さ」の源流。どの時代でも変わらない名作の1つ。

(文1年 濱田)



図書館サポーターに 新メンバーが加わりました！！

新メンバーに
意気込みを
聞いたわん！！



図書館をより楽しめるきっかけを作る活動をしていきたいです。

(法1年 武石)

グッズ作りを通して図書館の魅力が伝えられるように頑張ります。

(経1年 広松)

皆さんの読書活動がより楽しいものになるように頑張ります。

(文1年 清浦)

だより班の一員として、読者が新たな本と出合うきっかけをつくる活動がしたいと思っています。

(文1年 濱田)

展示班で図書館がさらに素敵に、魅力的になるよう活動していきたいです！

みんなが快適に図書館を利用できるように活動していきたいです。

(文1年 大内)

楽しんで、皆さんが図書館に行きたくなるような活動を頑張ります。

(経1年 眞鍋)

本に興味を持ってもらえるように楽しい企画を頑張って作ってきたいです。

(文1年 坂本)



北九州市立大学図書館

THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU LIBRARY



北九州市立大学図書館

〒802-8577 北九州市小倉南区北方 4-2-1
TEL: 093-964-4403 FAX: 093-964-4437
e-mail: lib-2@kitakyu-u.ac.jp

■開館時間■

月～土曜日: 午前 8 時 55 分～午後 9 時 30 分
日・祝日 : 午前 10 時～午後 6 時
休館日等は館内や HP の開館カレンダーをご確認ください。
URL: <https://www.kitakyu-u.ac.jp/lib/>

■ H P ■



■ SNS(X) ■



北九州市立大学図書館
図書館だより No.212

■発行日■
2025 年 10 月

■発行者■
北九州市立大学
図書館係